全国縦断仕事おこしシンポジウム

シンポジウム

シンポジスト

●村山隆さん(唐臼山の老松保存会ヤマンバの会)
●畠中俊哉さん(NPO上田広域市民事業ネットワーク)
●原山政幸さん　長野中高年雇用福祉事業団)
●村岡裕さん　介護老人福祉施設ともしび)
●伊藤盛久さん　望月町町会議員)
●滝澤恵一さん　中小企業診断士)

コーディネーター

●田中夏子さん　長野大学教員)

村山隆さん

唐臼山の老松保存会ヤマンバの会

唐臼山の老松保存会、愛称「ヤマンバの会」は結成されて９年になります。１本の老松（ヤマンバの木）がきっかけでこの会は結成されました。この老松は日本の村のどこにでもあるような赤松で、今では枯れて「切り株」しか残っていません。この木がなぜ枯れたのか、私たちに何を問いかけているのか。

私はあちこち「出稼ぎ」して、２２年ぶりにUターンして故郷に帰ってきました。そのとき村はすっかり変わってしまっていて、「一体俺は何のために帰ったのか」と嘆きました。ただ、鎮守の森の裏山だけは変わって

全国縦断仕事おこしシンポジウム

いませんでした。ところが10年前、その山のてっぺんにあった松の木が枯れてしまったのです。それからはどんどん山の松が枯れはじめ、私はとても悲しくなりました。そうしたら、松が「こんなことじゃだめだよ」と問いかけてきたのです。

村の老婆からの提案もあって、「切り株だけでも残そう。村でお別れ会をしよう」ということで、「ヤマンバの会」ができました。しかし里山と住民との関係は断絶していて、木が１本枯れたくらいで地域は動きません。私は親友のフォークシンガーの黒坂正文さんに手紙を書いて曲をつくってもらいました。この曲を幼稚園に持っていったら園児たちが歌いはじめました。「♪♪ヤマンバの松の木よ、風になれ。風になってトンボたちを守っておくれ。」そのうち、園児たちが家でも歌うので母親たちが関心を持つようになり、200名の「伐採お別れ会」を開くことができました。これで終ったと思っていたら、切り株の年輪から「村のルーツ」がわかり、村の歴史が発見されて郷土史の先生方が集まってくるようになりました。そしてそのことに感動した芸術家たちが集まってきて、絵本ができ、組曲ＣＤができ、仏像になり、コカリナやバイオリンになっていったのです。

いま、会員は130人。よく集まってきたな、よく続いているなと思いますが、この取り組みは新たな段階に入っています。里山に入ると、松くい虫の駆除に使われた塩化ビニールが放置されています。裏山にごろごろしていて、景観もこわすし、山火事がおきたらダイオキシンが発生します。このことを市役所に相談にいったら担当職員も悩んでいました。「なんとかしなければならないと思うが、そこまで手がまわらない」と。じゃあ、私たちが先ずやりましょうということで、裏山に入って調査し、勉強し、３年前から10人～20人でビニールの回収を始めました。そのことが大きな反響をよび、緊急地域雇用特別対策事業として３３４１万円の予算がつき、職安を通じての仕事おこしにつながったのです。

この教訓は『本質暴露より本質把握を、足元の人類的課題を発見して小さな個別からまず１歩踏み出し、純粋な心でとりくめば世の中は決して見捨てるものではない。』ということです。この事業の主体は地域住民です。社会が必要とすることを掘り起こすことが仕事おこしに通じると思います。社会が必要とする仕事は、協同組合思想に立つとよく見えるのかなと思ったりしています。

今後の課題の第1は、里山の復権とその現代的活用です。国土と人間の心を救うエキスが里山にはあると思います。そして課題の2つ目は、日々崩されている里山をどう再生させるか、どう守るかという政策提言が必要です。3つ目には、人づくりが大事です。私たちは「元気の出る学習講座・やまんば講座」を開講しています。これを継続していき、地元の学校との連携を強化する事が必要です。郷里に誇りをもてる学習をすることです。そして4つ目には人間の個性が発揮できる組織づくりをすることです。多様性を理解しあえる関係の組織というものは実に面白いものです。5つ目は、文化の香り高く村の人たちの共感を集めるとりくみを行ないたいと思っています。それは土着の文化に依拠した土台のうえに新しい文化を創造することです。これからも感動・感性を揺さぶる実践をやってい

全国縦断仕事おこしシンポジウム

きたいと思っています。6つ目には自治会の民主化の課題をあげたいと思います。最後にはこれらの集大成として唐臼山頂に「やまんば広場」を設置することです。「ヤマンバの木」は、地域の自然・歴史・文化・教育・共同体の再生を問いかけましたが、それを地域の上で真摯に実践すること。それを通して自然と共生した「住民主体の民主的地域づくり」が創造できると思うのです。

畠中俊哉さん

ＮＰＯ法人上田広域市民事業ネットワーク

12、3年前に柳町通りの保存活動に青年会議所の委員会として携わる機会があり、その中でいろんな方と知り合いました。青年会議所を卒業する40歳になっても活動できる拠点はないのかと思い、「ゆるやかネットワーク」という名前で活動してきました。そして、違う組み合わせの中から新しいものが生まれるのではないかということで、98年に30～40の団体が集まって「地球市民文化祭」を開きました。

その後ＮＰＯ法ができ、ＮＰＯ法人上田広域市民事業ネットワークをつくりました。地域には地域の事情があり、人には人それぞれの事情があります。その中から何を引き出すのか。実際、人と話したりお願いしたりすると、思った以上のことがでてきます。ネットワークで声をかけパートナーシップを組むことによって、世の中に何か影響を与えられるものがでてくるのではないかという思いを込めてこの名前をつけました。

産・官・学・民から多くの方を募り、最初は小さなシンポジウムなどを開きました。そして、経済産業省の外郭団体から補助金をもらって廃食油の再燃料化事業を行なっております。その廃食油でつくったディーゼルエンジンは車や農機具に使われています。その他には、映画ロケのスタッフに温かい食事を提供するフィルムコミッションサポート、地域に価値のある古い写真を集めてデジタル化するデジタルアーカイド事業などにとりくんでいます。

今後はコミュニティビジネス的な世の中になり、お互いに支えあって生きていく世の中が生まれてくるのではないでしょうか。これからも理念をしっかりもち、公共財を提供する主体になっていきたいと思っています。

原山政幸さん

長野中高年雇用福祉事業団

働く人が利用者の立場に立ち、しかも尊厳ある仕事と位置づけ、利用者と協同しあう。私たちはそういう仕事を専門性と

全国縦断仕事おこしシンポジウム

して高め、人と地域に貢献していくことをめざしています。

長野事業団は、失業反対闘争の中から自ら仕事をおこそうとできた事業団です。ビル管理、売店、レストラン、厨房、生協物流、手作り弁当・高齢者への宅配、ホームヘルパー養成講座から介護保険関連の仕事などを行っています。県下30か所の事業所に270人が働き、事業高は6億5000万です。私たちは「雇う・雇われる」という関係ではなく、働く人自身が所有・経営・労働を主体的に担う協同組合をめざしています。人と地域に役立つ仕事を労働者自身がおこす。必要な資金もみんなで出資し、事業計画もみんなで議論し決めます。

失業問題が深刻になり農業をはじめ本物の仕事が成り立たない社会になっているなかで、新しい経済システムが必要です。これからは人のぬくもりを感じられるコミュニティづくり、尊厳ある労働をめざす労働者協同組合が重要な役割を果たせるのではないかと思います。しかし、労働者協同組合には法制度がありません。いま私たちは協同労働の協同組合法の制定をめざすと同時に、実践的に仕事おこしの実体をつくろうと努力しています。特に、1中学校区に1つの地域福祉事業所をつくることを進めています。これからはみなさんと一緒に仕事おこしをしていきたいと思っています。

村岡裕さん

介護老人福祉施設ともしび

私は大阪生まれで、児童養護施設に7年勤務していました。いい仕事をやっているつもりでしたが施設は大きすぎて生活が見えず、限界を感じて退職しました。民間企業に勤めたりいろいろな仕事についたりしましたが、その後、長野県武石村に住むことになりました。その武石村に特養ホームができることになり、施設長になったのです。私は何年も前から施設は必要最低限あればいい、「施設ではない施設」ができればいいなと思ってきました。

あるとき、特養ホームの玄関に野菜を山のようにのせた軽トラックがつきました。おじいさんが降りてきて「この野菜おらがつくった。寄付するわい。」と。お礼をいって、いただきました。おじいさんに聞くと「じいちゃん、こんなにつくってどうするだい、特養にでも寄付したら。」といわれたので来たというのです。これを聞いて、なんとか仕入れのルートに生かせないかと思いました。この話を役場の職員に持ちかけたところ、野菜仕入れ事業としてたちあがりました。そして精神障害の若者が集荷の仕事に行ってくれることになりました。役場で保健婦さんから精神障害の若者の受け入れについて相談されて

全国縦断仕事おこしシンポジウム

いると聞いて、これを結び付けられないかと思ったのです。またこれは高齢者の生きがい支援、遊休農地の活用にもなります。

特養は便利すぎてお年寄りがやることがないので、これをどう克服していくのかということが課題です。「あんたたち、やることがあっていいね。」といわれたことがあります。とにかく快適に、と便利な機械をいれてきたのですが、それがお年寄りには幸せではなかったのです。やることがあるということは、コミュニケーションが必要になるということで、やることがないというのは、コミュニケーションをとらなくてもいいということです。コミュニケーションがないといろんな問題が生じてきます。絶望感につながってきます。仕事をつくり、まちづくりをし、そしてそこに役割、作業をとりもどしていく中で、いきいき生きていけるものがあるのではないでしょうか。これは社会福祉とか地域経済という枠の中ではなく、生活全般の中にあるものです。ユニットケア、宅老所、グループホームでは一緒に食事をつくるということをやっています。しかし特養という集団の中ではそういう「非効率」と言えるようなことはできません。効率と逆行するようなかたちで規模を小さくしたり、「30年前の生活再現」をしたりして役割や作業をとりもどすことも考えています。親子ではないけど家族といえるような関係の集団をつくりなおして、そこに「作業」を持ち込んでいきたいと思っています。

伊藤盛久さん

望月町町会議員

1989年、当時立命館大学教授の宮本憲一先生の主宰する、大阪の「あんじょうする会」と都市と農村との交流集会が行われました。その時に私は「手植えによる疎植1本植栽培で稲の持っている能力を活かす実践の課程の中で、稲に助けられて自然な形で減農薬・有機栽培の方向に歩んできました。」との報告をした所、以前から「地元のお米でこだわりのお酒を造りたい。」との熱い思いを持っていた造り酒屋の社長さんと意気投合し、私の食用米「ながのほまれ」を使って、純米酒「信濃のかたりべ」が誕生しました。

時を同じくして、有機栽培農家・ハニー牧場・そば職人・パン職人・造り酒屋の8人で異業種交流の「望月かたりべの会」を発足しました。高度成長の中で、合理化・分業化により分断された異業種が、もう一度手をつなぎ関連することは村おこしと地域振興につながるものと考えて立ち上げたのです。例えば、私の稲わらは有機肥料に、また、米は大沢酒造で酒になるだけでなく、そこから出た米ぬか・酒粕が地鶏の餌や粕漬けの原料になる。有機野菜・そば粉や野山の山野草と「かたりべ」のお酒が、手打ちそば処「職人館」で食される。ハニー牧場でできた蜂蜜と農家の地

全国縦断仕事おこしシンポジウム

卵を使ってパン屋が「ハニーどらやき」や「そば饅頭」をつくるなど、異業種の循環経済を実践しています。

94年からは「農より生き方を見つめて」をテーマに、大東文化大学・長野大学・法政大学・早稲田大学等のゼミ生達と田植えから収穫までの農業体験を通して、農業や食についての見方や考え方、生命の関りを様々なコミュニケーションから学びあう活動を行なっています。これまで延べ500人を越える人達と行なってきました。

99年からは、東京都三鷹で佐藤洋作さんが主宰する不登校の子供達の「フリースペース・コスモ」ともつきあいが始まり、お米づくりの農業体験を通して心の癒しと新たな生きる喜びを見いだす共同作業に取り組んでいます。昨年は、小学校６年生の後半から中学卒業まで不登校の子供を預かりましたが、その子は農作業を手伝いながら地域高校へほとんど休まず元気に通っています。今改めて自然や農業の持っている力はすごいなと思います。

蜜蜂には女王蜂、働き蜂、雄蜂がいますが、女王蜂が生む雌蜂は働き蜂と女王蜂にわかれます。女王蜂の寿命は8年～12年もあり、1年間に数万個の卵を産むことができる生殖能力がありますが、働き蜂の寿命は３か月から6ヶ月位しかなく、生殖能力もありません。この違いは食べ物に原因があります。女王蜂はロイヤルゼリー（王乳）を食べるのに対し、働き蜂は花粉が主な食べ物です。働き蜂の巣にある卵を産卵して3日以内に王乳がある王台巣に移してやると女王蜂になります。このように生き物にとって食べ物がいかに大切なものであるかを話しますと、素直に子ども達の心に響き、自然の営みは私達に大きなものを教えてくれます。

厳しい社会環境の中でより良いまちづくりや仕事おこしを求めて、今日のようなシンポジウムや私たちの活動を政府や自治体がどうサポートするのか、また、より多くの人達に認知していただく努力や働きかけをどう進めていくかが大事だと思います。住民主体のまちづくりや仕事おこしを進めていくためには、住民自治・地方自治が保障される適正規模があります。今国が進めている、住民自治をだめにしてしまう市町村合併に対してただ反対するのではなく、地域としての生業や生活の本当の豊かさを構築していく中での活動と一体となる取り組みが大事であると思います。

望月町では豊かな自然、農業、水、文化、人を活かすために、次の４つのキーポイントを考え実践しようと思っています。①清流を守り活かす。②里山や休耕地の活用。③付加価値・循環農業の推進（有機栽培の振興、多面的な農産加工）。④新たな風土づくりの都市交流（文化交流活動、自然・農業体験ステージの展開）。

今後、かたりべの会も範囲を広げ法人を立ち上げていこうと思っています。地元の春日温泉とハニー牧場そして里山や遊休耕地には花木を植え、これらを結び「花と蜜と湯の流れる里づくり」を実践することにより、環境、観光、生産、雇用の多面的な相乗効果を推進し、新たな段階に進めていきたいと考えています。更に温泉組合、耕作組合、商工会を巻きこんで地域全体として経済活動をしながら、新しい地域やまちづくりをしていくつもりです。

全国縦断仕事おこしシンポジウム

行政と住民運動・市民運動のより良いパートナーシップと発展のためには、「継続」と「自立」が大切だと思います。まちづくりや仕事おこしの中で大事なことは後継者が育つことです。それには生産活動、経済活動との結びつきを基礎におかないと、継続し発展することは厳しいと思います。そして行政は住民の様々な社会文化活動や経済活動が保証される環境づくりやそのサポートに徹するべきです。はじめから行政に頼ったり補助金をあてにしたりというのでなく、私たち一人一人自らが知恵を出し、汗をかき、金も出す自立と主体性の確立こそが大事ではないでしょうか。その実践から、真の感動や喜びと共に持続可能な発展の道が生まれてくるものと確信しています。

滝澤恵一さん

中小企業診断士

私は25歳のころ中小企業診断士の資格をとりました。営業マンでしたが、40になるとき若い頃の夢を実現しようと決心してコンサルタントの道を歩き始めました。仕事を始めて10年目の昨年秋に診断士など５人でコンサルタント会社を立ち上げ、このところは地域おこしのお手伝いをさせていただいています。コンサルタントを始めた当初はアメリカ流の効率とか拡大重視の仕事をしていましたが、なんかおかしいと感じはじめました。この延長線でいったら世の中おかしくなるとなんとなく気づき、思い切って環境、生命のことを勉強しはじめました。ＪＡなどから仕事を頼まれたのをきっかけに、環境をふくめた農業、まちづくりも農業の視点から指導させていただいております。

今日は八坂村の村民株主会社「あすかの杜」の事例をお話したいと思います。八坂村は人口1270人で、村民の多くが農業に携わっています。財団法人八坂村開発公社を解散し、新しい株式会社をつくってむらおこしをしたいので指導してくれ、という話があり、去年の８月からお付きあいしてきました。出資金5000万の半分は村で出し、残りは６つの地区で懇談・説明会を行いながら公募しました。すると900万円も多く集まったのです。村民や村を訪れるみなさんに喜んでもらえる会社にしようということで、社長も取締役も一般の村民が就任し、村長には代表権なしの会長になってもらいました。そして幹部は全国から公募し、一般社員は村民から採用しています。私は、「もうけるために会社をやるのではない。個性を生かして世の中の方に利用していただいた結果として、利益が出るような仕組みをつくるのが経営だ。」といっています。社員の給料はびっくりするくらい安いのですが、利益がでたら社員にボーナスを出し、村民である株主に配当して、余ったら村に寄付します。経営理念は「村政、村民との協力関係のもとで、①この村に生きる人、訪れる人に喜んでいただけるサービスを提供する、②ここで働く人が成長する機会をつくり、支援する、③村にある資

源を見つけ出し、磨き上げ、活用する。」としました。物産開発の事業、7月中旬オープン予定である山里の宿の明日香荘、カヌーや釣りなどが楽しめる遊湧自然館さざなみ、北アルプスと安曇野が一望できるレストランたかがりの事業を計画しています。環境問題についても、たとえば4月にオープンするさざなみには自動販売機ゼロをめざせというテーマを出しています。また、地域おこしや会社指導では、手作り、手仕事でできた商品の新しい市場をつくりたいとも考えています。大量生産・大量流通・大量販売・大量消費・大量廃棄という環境破壊の社会を越えていくためにも、農業、農産物、加工品、手作り、手仕事でできあがったものにもう1回目を向ける必要があります。そして地域の中だけの流通ではなく、地域間のネットワークをもった流通システムをつくりだしていきたいと思っています。

シンポジウムを終えて

感想

田中夏子　長野大学教員）

全国縦断仕事おこし・まちづくりシンポジウム、信州の集いは、五つの点で、印象深かった。第一は、農・里山・環境との深い関わり、第二に、個性的で「等身大の手法」へのこだわり、そして第三に、仕事や活動の質に対する考え方、第四に、見過ごされていた既存の資源を新たな視点で再評価・再活用する取り組み、第五に制度の改革や創造への志向である。

第一の点は、生活の傍らに常に農があり、里山がある中山間地ならではの特徴であろう。村山さんの話からは、暮らしの具体的な課題から軸足をずらさない、時間をかけた活動が、時として頑迷な農村地域社会の共感をも生んでいった過程がうかがえた。伊藤さんは、経済活動としての農を核としながら、その可能性を、環境、福祉、学び・雇用の場面にも広げていくことで、地域の諸資源が相乗的にその輝きを発揮できるよう、コーディネートする役割を担ってきた。滝澤さんもまた、手法は異なるものの、農業を柱に村民出資の事業体を展開するなど、一人ひとりの仕事の喜びと公益的な事業の提供との両立を各地で呼びかけてきた。

「構造改革」の論理からは、真っ先に矢面に立たされる「農」が、実は極めて多くの潜在的な力を宿していて、今各地で、その